

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：24201
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009 ～ 2011
 課題番号：21520585
 研究課題名（和文）リスニング指導において導入としてライティングの宿題を課した場合の有効性
 研究課題名（英文）Effectiveness of writing homework assignments in listening-centered classes.
 研究代表者
 小栗裕子（OGURI YUKO）
 滋賀県立大学・国際教育センター・准教授
 研究者番号：80224195

研究成果の概要（和文）：大学でのリスニング中心の授業にライティングの宿題を導入することによって、リスニング指導ではおろそかになりがちな文法力や語彙力を含む書く力の向上が可能になった。また1年間ライティングの宿題を継続することにより、学習者はライティング力、特に長い文章が書けるようになったという実感を得ることができるようになった。ただし、宿題のフィードバックが必要ですぐに返却をすることが重要な決め手である。

研究成果の概要

（英文）：Written homework in listening-centered classes was given to students whose major was not English, and their writing ability including grammar and vocabulary improved significantly. Doing written homework once a week for a year, these students felt they could write longer sentences compared to a year ago. Immediate feedback is an important role in homework assignments.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：リスニング、ライティング、宿題、フィードバック、指導法

1. 研究開始当初の背景

大学における英語教育は、「運用能力」習得を重視する中で、徐々にリスニング力も強化されるようになってきた。リスニングの指導は、リーディング指導過程の場合と同様に、プリリスニング、デュアリングリスニング、ポストリスニングという三つの過程から構成されるのが一般的である。

第一段階のプリリスニングは、トピックを知らせることによるスキーマの活性化、未習語彙の説明、そして内容把握をより容易にするタスクの提示から成る。

この分野の研究には、例えば、プリリスニングで難解な語彙を説明することにより、リスニングが助長されるかどうかを調べたものがある（小栗、2003）。数個の単語なら学習者の記憶に残り、当然内容理解につながると考えられる。しかしながら、毎週数個の単語を学習者が習得したとしても、多岐に渡る内容を聴き取るために必要な語彙習得には到底及ばない。

また、リーディング中心の授業にリスニングを取り入れ、読解をする過程で文法力や単

語力を強化する方法もある（小栗、2005、2006）。この場合、前者に多くの授業時間が必要となり、リスニング指導の時間が制限されることになるし、これら両スキルとも受信（input）が中心である。一方、ライティング指導は、ライティングのみに特化した指導、またはリーディングとの関連で指導するのが一般的である。

そこで、当研究者は、数年前から導入としてデュアリングリスニングのトピックに関する内容について、既にプリリスニング活動として提示されている英語の質問 10 個程に英語 1、2 文で自由に答える宿題を課するという指導法を行ってきた。質問に正確に答えることにより、未習単語の理解、語彙の習得が可能になる。自身のことについて答えるので、本人が必要としている単語を必然的に覚えることができる。また、リスニング指導では、内容把握に重点を置いているため（そうでないと全体像が掴めない）、文構造に対する配慮が欠けることは否めないが、書くことにより文法知識の強化につながる。

宿題として出すことにより、学生の英語に接する時間が増すばかりでなく、授業時間をリスニング指導のために有効に使うことができる。また、課されるのはデュアリングリスニングのトピックに関する質問であるため、リスニング時のスキーマの活性化にも結びつく。

当研究者は、リスニング指導におけるこのライティング導入の効果について 1 年終了後に検証を行い、プリとポストのリスニング力測定およびライティングに関する質問紙による調査分析を行った。その結果、リスニング力においては統計的に有意な向上を示し、ライティング力についてもある程度向上したという数値結果を得た。この検証結果からライティングの宿題を返却する時のフィードバックの有効性も見出された。しかしながら、果たしてどのような内容のフィードバックが学生のライティング力向上につながるのかは明らかにできなかったばかりか、実際にライティングを導入することによりリスニング力が向上したという因果関係についての統計的検証を行うまでには至っていない。

<参考文献>

小栗裕子 (2006). 「英語習得において聴解力は読解力を助長するか：一年間の調査結果」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第 11 号、23-32.

小栗裕子 (2005). 「リスニング指導の効果ーリスニング vs. リスニング+リーデ

ィング指導」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第 10 号、69-78.

小栗裕子 (2003). 「効果的なリスニング指導法：学習者の視点」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第 8 号、65-75.

2. 研究の目的

この 2008 年のリスニング指導にライティングの宿題を導入した有効性についての研究背景を基に、以下の研究目標を立てた。

(1) 1 年間の指導において、毎回ライティングの宿題を課すことにより、リスニング力が向上するという因果関係について証明する。

(2) ライティングの宿題により、学生のライティング力がどれほど上達するのかを定期的に測定評価し、宿題にライティングを課すことの効果について立証する。

(3) それと同時にライティングの宿題は、どのような形式でどのようなフィードバックが一番効果的なのかも検証し、学習者が最終的には自立して発信できるようなポートフォリオを完成させる。

当研究者の 2008 年の分析によれば、「宿題を提出する前に自分の作文を見直したか」というアンケート項目に対して、リスニング力の上位群は、下位群と比較して有意に高い得点結果を得ている。これは、上位群は、それだけ自分の書いたものを正確に伝えたいと考えているからであると推測できる。また、この分析結果からフィードバックの効果も、学生が評価していることが判明した。

しかしながら、多くの学生のライティングにフィードバックをすることは教師にとって大変大きな労力である。そこで、A4 サイズの用紙の一番下に、提出者が見直しをしたかのチェック項目欄を設けるとともに、新出単語習得欄を作成して、学生が絶えず自分の発信する英文を見直す習慣をつけるような試み続け、学生にとって最も効果的なライティング力育成方法を発見する。

3. 研究の方法

当研究者は、リスニング指導におけるこのライティングの宿題導入の効果について、プリとポストのリスニング力測定およびライ

ティング力評価および質問紙による調査分析を1年終了ごとに行った。

2009年から研究者が担当するリスニング中心のクラスにて教材 *New Airwaves* を使用しながら実践をした。毎回授業の最後に次回学習する内容に関連した英文の質問 10 個程度（例えば “I need a job” がトピックの場合、What are your strengths and weaknesses?）に英語 1～3 文で答える宿題を課し、翌週授業の最初に回収、翌々週各自の宿題に内容や文法的間違いに対するコメントをつけてフィードバックを行った。内容についてのコメントは、たとえば “good”、“nice”、“good luck” とか、場合によっては “What do you mean?” など、意味が通じないことを知らせた。また、学生がよく間違える箇所については、クラス全体に板書をして説明する指導を執った。

英語の質問は、教材に *Getting ready to listen* や *Time to talk* として記載されており、通常学習者は事前に質問項目を読み、該当する項目にチェックをしたり、パートナーと英語で話す形式になっている。最初の時間に宿題の作文に関する次のような注意事項を書いたハンドアウトを学生に配付し、それぞれの項目について詳細に説明を行なった。

宿題の目標：自分に興味ある内容に対して英文数行でできるだけ早く書くこと

- (1) 日本語を英語に直さないこと（英語で考える）
- (2) 20分から30分で書き上げること
- (3) 自分について書くことを原則とするが、書きたくない内容の場合は自由にフィクションにしてよいこと
- (4) 全部の質問に対して同じ長さにする必要はないこと（自分に興味がある内容の場合は多少長くてもよい）
- (5) 毎回新しい単語を2～5個入れて作文をすること
- (6) 一度書いた作文は必ず見直すこと
- (7) 鉛筆ではっきり、読みやすい文字で書くこと
- (8) 辞書をあまり頼りにしないこと（単語等を確認することは可）
- (9) 遅刻をした場合は受け取らないこと（ただし交通機関等の遅れの場合は例外）
- 10) 欠席した場合も受け取らないこと

30 回中 18 回課した宿題のための用紙は、毎回 A4 サイズに 20 行程罫線を引いた筆者手作りの用紙を用意した。この用紙の最後に 2、3 行のスペースで “new words” 欄を設け、ここに新しい単語を記入できるようにした。これは、自分のことを表現する時に必要な未習単語を作文の中で使用することを期待してのことであり、その中の一角に見直しをした日付を入れる “check” 欄も設けた。ここに日

ちを記入することにより、書いた作文を意識して推敲できるのではと考えたからである。

4. 研究成果

リスニング力に対しては、JACET Intermediate Listening Comprehension Test と TOEIC IP Test を使用し、どれほど向上したかを測定した。その結果、1年間で有意に向上したことが確認された。ライティング力に関しては、12 分の自由作文を年 3 回実施し、英語母語話者が総合的評価法を用いて評価をした。その結果、1 回目と比較して、2 回目、3 回目とも有意に評価が高くなっている。また語数も 1 回目と比較すると、2、3 回目は有意に増えている。ただし、1年間で詳細に見ると、前期の向上が著しいが、後期にはその顕著さはみられなくなった。

1年ごとに結果を分析し、指導法を見直しながら研究を進めた。総括すると以下のようになる。

- (1) 日常必要な自己表現のライティング力は宿題を課しても半期 15 回で上達すること
- (2) リスニング力とライティング力が向上すればリーディング力も引き上げられること
- (3) 1 年間書くことを継続すれば「長い文章が書けるようになった」という実感が得られること
- (4) ライティングの宿題をすることによってリスニング力も向上したという実感があること
- (5) ライティング用紙のチェック欄を設けることは作文を見直すためには効果的なこと
- (6) 書くことにより文法に気をつけるようになること
- (7) 作文で自分を表現することにより会話力も向上すると感じられること
- (8) 学習者の興味・関心のある題材を宿題に選択することは重要なこと

当初仮定したリスニング力とライティング力との間には、読解力と語彙力との間にみとめられるような相関関係はこの研究結果から認められなかった。しかし、両スキルが互いに補いあって、学習者の英語力全体の向上に役に立っていることは疑いのない事実である。それは、アンケートを実施し、その項目の中の「作文を書くことによりリスニング力向上に役に立ったと思う」と受講者に感じさせたことから支持されよう。対象者は異なっているが、小栗（2008）でも同様の指導法で多くの学生が「書くことで単語を覚えた」や「リスニングでは意識していない文法の習得が促された」とコメントをしている。

さらに、自律した学習者を育成すると言う視点からすれば、フィードバックの仕方にも今後十分な工夫がなされるべきであろう。相関分析で「自分の書いた作文を見直す」ことは、「読解力向上」や「単語力習得」に大きな影響力がある。毎回宿題用に配布する A4 用紙に見直し欄と new words 欄を設けるのみでも見直しを習慣化するという点で効果が期待できる。

リスニング力にしても、ライティング力の語数の多さにしても、大学入学時の習熟度と1年後とは強い相関がある。つまり、4月にはすでに学生達がどれほど向上するのかを予測することができるのである。これは、高等学校までの英語力が大学での授業に大きく反映されるということである。大学での英語教育は、その土台を基にして、作文ならば内容の上達に焦点を当て、さまざまな読み手を仮定して書いたり、構成力や表現力の工夫を指導できるのではないだろうか。作文の語数と評価のいずれとも相関の強かった「日本語でも書くことが好きだ」は、国語教育の領域であり、英語の教員のみで達成することはできないが、興味深い結果である。

<参考文献>

小栗裕子 (2008). 「リスニング指導におけるライティング導入の有効性」『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第13号、pp.27-38

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 小栗裕子「リスニング授業に探るライティング力育成方法の検証」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』査読なし15号、pp.35-44.
- ② 小栗裕子「リスニング授業におけるライティング力育成-指導法の検証」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』査読なし16号、pp.13-22.

[学会発表] (計4件)

- ① 小栗裕子「リスニングとライティングの接点：作文の宿題」第48回大学英語教育学会全国大会、北海学園大学、2009年9月5日.
- ② 小栗裕子「リスニング授業に探るライティング力育成方法の検証」第49回大学英語教育学会全国大会、宮城大学、2010年9月8日.
- ③ 小栗裕子「リスニング授業がもたらすライティング力の伸長-指導法の検証」第37回全国英語教育学会山形研究大会、山

形大学、2011年8月9日。

- ④ Oguri, Yuko 'Effectiveness of writing homework assignments in listening-centered classes.' JACET Convention, Seinan Gakuin University in Fukuoka. September 2, 2011.

[図書] (計2件)

- ① 富田かおる・小栗裕子・河内千栄子 『リスニングとスピーキングの理論と実践-効果的な授業を目指して』大修館書店、2011年 pp.256.
- ② 南出康世・小栗裕子 ほか8名 **BIG DIPPER English Expression 1** (文部科学省検定済教科書) 高等学校外国語科用、数研出版株式会社 2012年 pp.120.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小栗 裕子 (OGURI YUKO)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：80224195